

天国にいるあなたに

田辺昭子

岐阜県・六七・無職

あなたの亡くなった朝、香り高く咲いた金木犀の花が今年は二〇日も遅く開きました。金と銀が一本になった不思議な大木は、近江の家から移植し丸く刈り込まれそれぞれの花を咲かせてくれています。あなたが天に召されて一年、青春の日々を戦争に重ねて過ごしてきたお蔭でしょうか、私は雑草のように生きて参りました。

思えばあなたからの熱烈な恋文で、つい結婚してしまった私ですが、五〇年近い年月にさしもの恋文も、ペンの字は薄れ折り目もぼろぼろになってきました。簞笥の奥深く仕舞われた手紙の束……。いろいろ考えた末、私は娘や孫にこの秘めやかな恋文を残すことを思いつきました。私一人で所有するのは勿体ないほどの名文だったからなのです。

時代と共に手紙を書く人は少なく、電話、ファックスと文明の利器は巷に溢れています。この中で育った若い者達が、その昔の祖父母の恋文を目にすることを考えると

実はとても恥ずかしく勇気がいりました。然し結婚を決意させた愛の言葉を残しておきたいとの思いは断ち難く、この前処女出版した私の本の中にそっと登場させました。ごめんなさいね！

「あんな手紙は二度と書けない……」照れながら言っていたあなた。それからの人生に何度も横道にそれた悪い人でしたけど、私は何時も恋文を書いた時のあなたの真実を信じてついて参りました。若かったあなたも私も貧しい時代を過ごし、平凡でしたが良い人生でした。

あの時あなたからの熱烈なアタックに「私には婚約者がおります。折角ですが……」とだけお返事してしまいました。

今改めてお手紙認めます。「あなたと歩いた人生は幸せでした。感謝します」と。

時はすべてを浄化させてくれます。いのちの曆をたぐり寄せながら遥かに遠い日を偲んでいます。

木々の紅葉が過ぎ落葉舞う季節、天国から見守って下さい。